



「ヘッドライトに映してきた世界」  
竹中涼（本学文学部学生／写真部）

平安の昔から、  
「昔の人」の懐かしい思い出を  
呼びおこすとされた橘の花の香り。  
その橘を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。  
「CHRONOS 時の鳥」は、  
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、  
「時」の天空をはばたく鳥を  
イメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.41 2019.3

C 〈巻頭エッセイ〉  
O 女人結界をこえて  
N イギリス女性生活誌 41  
T 考古遺物の中の女性 2  
E 物語の女性 2  
N 近代日本音楽史を彩る女性たち 2  
T 化粧研究雑感—女性のライフサイクルと装い—  
S 新刊紹介  
S INFORMATION

# 女人結界をこえて

永井和

本学文学部歴史学科教授

富山県にある立山は、伝承によれば開山が奈良時代にさかのぼる信仰登山のメッカである。しかし、近くにある峻嶮な剱岳は、立山曼荼羅に地獄の針の山として描かれているように、登ることの出来ない山・登ってはいけない山とされてきた。明治時代になって陸地測量部による全国の測量がはじまり、測量官が何度か剱岳の登頂を試みたが、あまりの険しさのため幾度も失敗を繰り返した。ようやく一九〇七年七月一日に、測量官の柴崎芳太郎一行が登頂に成功したが、前人未踏と思われていた山頂に古い銅錫杖頭と鉄剣（のちに奈良時代末期から平安時代初期のものとして鑑定された）を発見した。つまり、登る者がいないとされた剱岳にも、かなり昔に登頂を果たした信仰登山者がいたのであった。

このエピソードからわかるように、近代登山がはじまる前に、すでに日本には分厚い信仰登山の歴史の蓄積があった。同時にこのことは、日本では、明治五年（一八七二）三月二十七日の太政官布告九八号女人結界撤廃令が出されるまで、多くの山岳において女性の登頂が阻まれ続けてきたことを意味している。一〇世紀半ばに中国五代の僧義楚が編纂した仏教類書『釈氏六帖』に金峯山（現在の吉野・大峰山）の「女人禁制」のことが記

されているように、修験道を核に成立した日本の山岳宗教が、そもその初めから女性の登山を厳しく制限してきたからである。

鈴木正崇によれば、修験道は、信仰対象である山岳を常人の住む日常的世界（Ⅱ里）とは異なる非日常的な聖なる空間として設定し、その聖なる空間のうちにおいて擬死再生を遂げることで、現実の時間とは逆転した時間を体験し、そうすることで自然の力を自らのうちに取り込み、常人にはない霊力・験力を獲得せんとする。女人結界は「男性と女性がともにいることで成り立つ現世での秩序を、男性から女性を一時的に切り離すことで非日常をつくり出」すために設けられた境界であるという（鈴木正崇『女人禁制』吉川弘文館、二〇〇二年、一五二頁）。

この結果観に仏教の女性罪業観と神道や陰陽道に由来する穢れ観念とが結びついて成立した不浄観とがあらわさって、平安期に「女人禁制」の禁忌が成立したというのが、現在の通説理解だと思われるが、一旦禁忌が成立すると、それは強固な習俗として固定化し、千年近くにわたって維持されることになった。その禁忌は修験道や仏教界にとどまらず、もともとからあった民俗的な山の

神信仰と結びついて、山岳周辺の農山村の住民にも深く浸透し、「女人禁制」の侵犯は山の神の怒りを招き、農作物や山野の獲物の不作・不獲をもたらすとして、女人登山への激しい反発をまねくことになった。

しかし、長い信仰登山の歴史の中で、「女人禁制」の禁忌を信仰の内部から打破しようとする試みがなかったわけではない。それは、各地に登拝講が多数組織され、霊山をめざす信仰登山が大衆化した近世になってあらわれた。よく知られているのは、富士講身祿派の行者小谷三志による富士登山の試みである。享保一八年に富士山七合五勺にある烏帽子岩で断食行をおこない、そのまま入定した伊藤食行身祿の百回忌を記念するため、三志は、天保二年に江戸深川の鎌倉屋十兵衛の娘で、尾張藩江戸屋敷の奥女中をしていた高山たつ（当時二四歳）を伴い、富士山に登拝した。たつは男装し、登山者の少ない九月二六日（新暦一〇月二〇日）に無事登頂した。文献によって確認できる最初の女性による富士山登頂とされる。

そもそも富士講身祿派は女性信者の富士登拝に積極的であり、身祿の三女で、その後継者となった伊藤一行は女性信者の登山を奨励し、彼女自身、安永四年に富士山二合目の女人結界まで登山した。一行の孫弟子にあたる三志は、四合五勺までは女性の登拝が許される特別の年である富士山御縁年（庚申年）にあたる寛政二二年に、吉田口五合五勺まで女性を登山させた。さらに文政六年には仁孝天皇女御の安産願のため、八合目までの女人登山を計画した。ただし、これは実行に移されなかった（竹谷朝負『富士山と女人禁制』岩田書院、二〇一一年）。つまり、高山たつの登頂は、三〇年以上にわたる三志の宿願達成であった。

なぜ、これほどまでに三志は女人登山に執着したので

あろうか。富士講に関する私の乏しい知識からの憶測にすぎないが、次のように考えられるのではないだろうか。富士講は山岳宗教として修験道からさまざまなものを継承しているが、身祿派のそれは信仰の核心部分で修験道を否定していた。身祿は、富士山Ⅱ仙元大菩薩は万物の根源となる祖神であり、富士山に登拝することは、仙元大菩薩と一体化することである。人間は男女を問わず、すべて己の内に菩薩となりうる性を宿しており、日常生活において勤勉力行、諸事儉約に勤め、仙元大菩薩への信仰をもって家業に励めば、みな仏Ⅱ菩薩となりうる（救われる）と説いた。

身祿が加持祈祷を排したことからわかるように、「女人結界の向こうの聖なる空間において厳しい修行を行うことで初めて悟りに達することができ、それによって得た霊力・験力によって衆生を救済する」という修験道の宗教観・救済観は根本的に否定されている。仙元大菩薩への信仰と日々の道徳実践によって、万人が、男女を問わず救済されると信じる富士講身祿派にとり、女性の登拝を禁止する富士登山の現状は信仰上何としても受け入れられないものであったと考えられる。

興味深いのは、このような「女人禁制」の緩和・撤廃をめざす志向が、富士講の登山者を多く受け入れ、その世話を生業としていた吉田口の御師達によって支持されたことであろう。彼らは、万延元年の御縁年を迎えるにあたり、寺社奉行に申請して、「四月より八月迄男女に限らず、信心の輩參詣致さるべきもの也」との一文を含む「富士山御縁年令式」を定め、江戸市中に高札を立てることに成功している。通常の御縁年であれば、女人登拝は四合五勺までとされていたが、この年には少なからずの数の女性が登頂したと推測されている（竹谷前掲書）。

# 41

## ●連載●イギリス女性生活誌 一九世紀イギリスの レジエンド・ウーマンたち2 ―近代看護における聖女―

松浦 京子

本学文学部歴史学科教授

前回を受けて、ナイティンゲール看護学校（聖トマス病院付属看護師養成所）の初期の修了生の二人を一九世紀イギリスのレジエンド・ウーマンとして取り上げていきたい。まず一人は、困窮貧民の収容機関である救貧院（ワークハウス）付属施療院の看護の歴史に名を残すアグネス・E・ジョーンズで、もう一人は、在宅貧民を対象とした訪問看護制度の定着に大きな足跡を残したフローレンス・S・リー（クレイヴン夫人）である。

イギリスにおける近代看護の歴史は、前回触れたように中流階級女性に与ったプロフェッションを確立しようとする動き（それはとりもなおさず看護職の地位の上昇を意味する）であったわけであるが、同時に、その活動は、上記の二人の紹介文からも分かるように、貧民対象の救済活動として存在していた。一九世紀イギリスはジ・

エンパイア（大英帝国）と呼ばれ、かつまた「世界の工場」として未曾有の経済的繁栄を誇っていた。しかし、光が強ければそれだけ陰影は深くなるもので、貧民と呼ばれる生活苦にあえぐ人々も多数存在していた。世界初の産業革命に邁進しただけに工業化と都市化にともなう労働環境や住環境の激変悪化への対応はなおざりで、過重労働による傷病、伝染性疾患の蔓延による健康被害も深刻で、その結果貧困の堆積が進むという状況であったのである。そのうえ、当時の自由放任政策の下ではいわゆる国家福祉は望むべくもなかった。

こうした状況に対しては、第一六回以降数回にわたって触れた「福祉の複合体」と呼ばれる、脆弱な公的給付を私的な慈善や篤志組織の保護・救済の

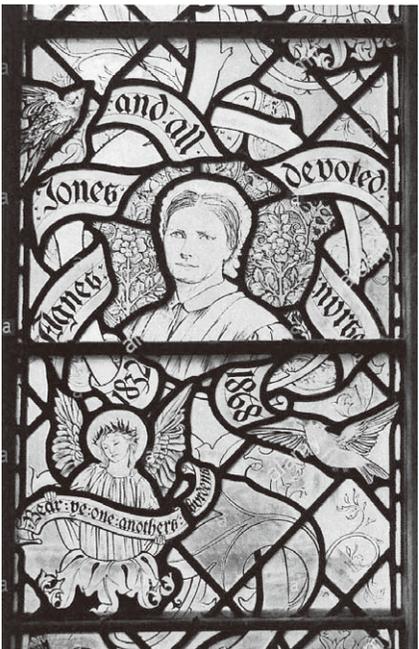
努力が補う社会的給付体系が存在しており、その私的な保護・救済活動を支えたのが中流階級の女性であったわけである。こうした女性たちを救済活動に駆り立てた要因についても、すでにいろいろと語ってきた。ある種の「流行り」や「気晴らし」から手を染める者も確かに居たが、その一方で、「有閑」であることに倦み自己実現を求めて社会貢献に専心した者も居れば、福音主義思想の流れを汲む宗教的動機に突き動かされる者も居たのである。

ナイティンゲール自身も、信仰に根差す「召命」、そして社会貢献の意識から貧民看護を志した人であった。そう、経済繁栄が横溢する社会のなかで少し目を凝らせば、生活苦と病苦にあえぐ貧民の姿に気づかされて彼らへ救済の手を差し伸べようとするとき、大きな意義を以て認識されるのが「看護」であったのである。前回触れたように、

「看護」そのものが医学の発達、病院改革によって変わりつつあった。ただし、当時の病院はそれ自体が慈善病院であり、貧民を対象に無償で加療する一方でそれに基づき医学研究を進める場であった。それゆえ、富裕層の家庭に雇われてベッドサイドに付き添うプライベート・ナースも存在してはいたが、基本的に「看護」とは貧民を対象とした活動であったのである。

アグネス・E・ジョーンズは、宗教的動機から貧民看護を志した中流階級女性の象徴的存在として知られている。一八三二年、ケンブリッジに生まれた彼女の家は、インド総督や軍将校、国教会聖職者を輩出する、いわゆる疑似ジェントルマン層に属し、富裕であった。彼女自身は深い信仰心と原罪認識をもち他者への献身に専心する娘時代を過ごし、そして

ヨーロッパ大陸でのホリデーに家族とともに赴いた際に、ナイティンゲールが看護訓練を受けたカイザーベルト施設（カトリックの修道女の看護活動に對抗して、プロテスタント信仰を持つ女性を貧民対象の看護者に養成する病院施設）出身の女性に出会ったことを一つ



リバプール大聖堂のレディース・チャペルにあるアグネス・E・ジョーンズを表したステンドグラス

の契機として、看護を志すようになった。一八六二年にナイティンゲール看護学校に入り一年の訓練を終えロンドン・グレート・ノーザン病院の看護師となった。そして、一八六四年、彼女は、国内最大の救貧院付属施療院であるリバプール・ワークハウス・インファーマリからナイティンゲール看護学校修了生のトレイインド・ナースの派遣要請があったとき、それに応じたのであった。

救貧院付属の施療院とは、救貧法に基づいて開設された貧民収容施設に併設された病院というべきものであったが、地方税によって運営されるこの種の施設は劣悪な環境で知られており、看護スタッフも収容されている貧民女性を選抜して当てているという状況であった。こうした状況の改革を求める動き（ワークハウス改革運動）がようやく起こり、その一環としてリバプー

ルの施療院がトレイインド・ナースを雇い入れることとなったのである。アグネスは一八六五年に一二名の修了生と七名の見習い看護師を率いて、救貧院付属施療院初のトレイインド・ナースの看護師長として着任した。当然ながら、当時の施療院の状況は「無秩序」を絵に描いたようなものであり、彼女は、この状況の改善と、加えて収容貧民女性に看護訓練を施す事に、文字通り寝食を忘れて奮闘することとなった。そして、着任からわずか三年後、過労状態のなかで発疹チフスに罹患し三五歳の若さでなくなった。

このアグネスの働きぶりは、深い信仰心とともに患者に献身する「聖女」として捉えられるところとなり、リバプール大聖堂のステンドグラスにその姿が描かれている。レディ・ナースによる貧民への献身という伝説となったのである。ナイティンゲールも彼女の死に際して、哀悼の意を示すとともにその働きに心からの賛辞を送っている。しかし、一方で、彼女の死は、ナイティンゲールにとって目指した近代看護に照らしてみたいとき、ただ哀悼するだけではない、懸念が現実のものとなったことへの後悔と腹立たしさがよぎるものだったのではないだろうか。この点については次回で触れたい。

# 考古遺物の中の女性 2

## 日本古代の性別分業と土器生産 (2)

中久保 辰夫

本学文学部歴史遺産学科准教授



性別分業を通時代的に考えるために、日本古代の土器研究はどういった貢献ができるだろうか。前号において、一つの例として土器製作者の性別をめぐら研究を挙げた。要約すると、1) 民族学の研究成果によると、自家消費的な土器生産は女性が担った事例が多いこと、2) 日本では酸化焰焼成の軟質土器である土師器を通時代的に女性が製作したこと、3) 日本の事例は、「専業化」が必ずしも女性優位労働から男性優位労働への変化を意味しない可能性を提示できることである。

本稿では、日本古代のもう一つの主要な土器である須恵器に注目したい。須恵器生産者の性別 須恵器は、四世紀末から五世紀初頭に朝鮮半島より日本列島へ渡来した窯業技術体系をもとに、古代から中世にかけて生産された日本の還元焰焼成の焼き物である。そして、男性が生産に従事したと考えら

りはじめた五世紀前半葉に増加する傾向にあるが、四世紀末～五世紀初頭はほとんどない。したがって、仮説1)は根拠がやや弱い。同じ理由



大阪府大庭寺遺跡から出土した「須恵器の長胴甕」の一例  
公益財団法人大阪府文化財センター保管/筆者撮影

胸部上半分からは口縁部にかけて、還元焰焼成により、色調が灰色となる。須恵器らしい色あいである。

口縁部はやや面をもつ＝須恵器の技法と韓式系軟質土器の長胴甕と類似

胸部下半分は焼成温度が低いために、赤褐色を呈している。やや土師器に似るが、還元が不十分であるため

外表面は羽子板状の木製工具を押し当てた痕跡が明瞭。韓式系軟質土器に多く認められる。

で3)も成り立ち難い。須恵器の製作者と韓式系軟質土器の製作者は最初期の段階では異なっていた蓋然性が高いというところまでの推測が成り立つ。よって2)が穏当な理解となる。筆者はこれに関する専論を執筆した際に、注で「初期の須恵器製作の場においては労働の軽重に応じた男女の協業も一考の価値があるだろう」と述べた(中久保二〇一〇)。大甕や壺、器台といった大型の須恵器は男性が、日常調理具は女性といった分担が具体的な想定である。

日韓の窯業生産 朝鮮半島南部では、陶質土器(韓国では還元焰焼成の土器

れている。しかし、初期の須恵器生産に着目すると、実のところ、複雑な問題がそこにはある。

最初期の須恵器窯は、兵庫県神戸市の出合窯、大阪府堺市の大庭寺遺跡にあるTG232号窯が代表例であり、出合窯は四世紀後葉から末、TG232号窯は四世紀末から五世紀初頭の時期が想定されている。年代的な位置づけには論争があるが、ここでは深入りせずに、どちらの窯においても韓式系軟質土器と分類できる土器が一定数出土している。

この韓式系軟質土器とは、貯蔵や膳を主とする須恵器と違って、酸化焰焼成の調理道具であり、日韓の地で野焼き焼成されたものである。したがって、すべてが須恵器の窯から出土するものではない。そして、調理が女性によって担われ、自家消費的な土器が女

を陶質土器という)を専門的に生産した窯群と野焼きの軟質土器生産のみの遺跡が知られているが、集落内の小規模な窯群では陶質土器生産と野焼き土器生産が併存しているという(長友二〇一八)。そして、陶質土器生産は男性が、日常の調理用土器は女性が生産したと想定されている。

一方、日本列島における須恵器生産は、小規模な窯もあるが、大阪府南部、現在の堺市から和泉市にかけて広がる陶邑窯跡群という大規模生産地が存在する。発掘調査成果により、多数の窯とともに、韓半島系陶工が集中して居住した集落も明らかとなっている(岡戸一九九四)。この遺跡は、陶工たちの居住の場とも考えられ、専門的な生産にかかわる男性陶工のみによって構成される工房群といった想定よりも、家族ないし男女から成る、生活と不離一体の手工業の場とみたほうが良い。マードックが明らかとした、女性優位の労働は居住地の近隣で営みうる労働が多い傾向は、いまの議論にとって示唆に富む(Murdock 1949)。

しかし、TK73号窯やTK85窯等、須恵器生産が軌道にのりはじめた時期となると、「須恵器の韓式系軟質土器」には須恵器特有の技法が導入される。この段階では韓式系軟質土器を製作し

性によって製作されたという民族学の成果を参考とすれば、韓式系軟質土器の製作者は女性であると想定される。三つの仮説 それでは、須恵器窯から出土した韓式系軟質土器の製作者の性別は男女どちらなのだろうか。とりいそぎ、1) 須恵器製作者である男性がつくった、2) 須恵器は男性がつくり、韓式系軟質土器は女性が製作して、両者を須恵器の窯で焼成した、3) 須恵器、韓式系軟質土器ともに女性が製作した、と少なくとも三つの仮説が立てられる。

この仮説を検証していくためには、この土器に須恵器、韓式系軟質土器のどちらの技法が用いられているのかといった観察が手がかりとなる。土器片を手にとり、須恵器特有の技法や使用された工具を読み取り、韓式系軟質土器製作の流儀と見分けていく作業をくりかえす。地道な作業であるが、ここから判明することは多い。すると、「須恵器の韓式系軟質土器」には須恵器の製作技法が多用されていないことがわかっていく。須恵器の製作者が製作したならば、たとえば、外表面に小さな木の板を押しあてたカキメ、内面に押しあてられた木製当て具の痕跡などがのこるはずだが、それが無い。こういった痕跡は須恵器生産が軌道にの

っていた女性の手から離れ、製作者が男性へと変化した可能性がある。ここから男性と女性で製作する土器とその専業度合が分岐していくのだろう。以上のように考古資料からの考察を進めていくと、土師器は女性、須恵器は男性といった単純な図式で、土器生産を担った性別をとらえることの難しさを覚える。資料に基づき、性差に関する議論を展開しなければならぬ。このことは土器生産に限らず、他の労働種目に関しても同様であろう。

このように徐々に生産が男性によって担われていく須恵器と、連綿と女性が製作を続けるといった性別分業が、日本古代の土器にはあらわれる。このことがどういった意味をもつのかといったことは、機会があれば論じたい。

参考文献:

- 岡戸哲紀「揺籃期の陶邑」『文化財学論集』(文化財学論集刊行会、一九九四)
- 岡戸哲紀ほか「陶邑・大庭寺遺跡」V(大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター、一九九六)
- 中久保辰夫「陶邑における韓式系軟質土器の変容過程」『韓式系土器研究』XI(韓式系土器研究会、二〇一〇)
- 長友朋子「日本列島における土器窯の導入」『待兼山考古学論集』III(大阪大学考古学研究室、二〇一八)
- Murdock, G. P. *Social structure*. New York: Macmillan Company, 1949.

# 物語の女性 2

『栄花物語』——一条天皇の中宮、藤原彰子——

野村 倫子 本学文学部日本語日本文学教科教授

昨年（二〇一八）十一月二十二日の京都新聞の第一面は、「道長の「望月」輝き千年」の見出しで、同日の夜は藤原道長が娘三人を后にした喜びを歌って千年目に当たると報じた。曇りになるとの予報であったが、当夜は煌々とした満月が出た。

道長の三人の娘とは、一条天皇の中宮となった長女彰子、三条天皇の中宮となった二女妍子、そして後一条天皇中宮の三女威子である。威子が中宮になった寛仁二年（一〇一八）十月十六日、彰子はすでに太皇太后宮であり、妍子が同日皇太后宮となり、姉妹三人で後の位を独占したことで道長が歎びの和歌を詠んだと『小右記』（藤原実資の日記）は伝える。『栄花物語』はこの歌を取めてはいないが、道長の後宮政策の基盤を作ったのが、一条天皇の中宮となり、後一条天皇・後朱雀天皇の母となった長女の彰子である。

が十一歳で元服した帝のもとに二十歳になる妹の威子が入内して中宮となると、「同じ大臣の御女、后にて二所ながら並ばせたまへる」ことさえ珍しい中、道長家では存命の姉妹が三后となった（巻十四・あさみどり）奇跡は、冒頭の記事のとおりである。道長出家の述懐に、「内、東宮」に続けて、「三所の后、院の女御おはす」と女性たちの名誉を挙げ、以下に「左大臣」等男子が列挙されるように（巻十五・うたがひ）三后は道長の栄華の象徴であった。やがて末妹の嬉子も、甥である東宮に入内する。長姉彰子所生の皇子二人に妹二人が入内した結果、彰子は天皇家に於いても、道長家の姉妹に於いても頂点に立ったのである。先の三后に加えて「今一所は東宮の女御にて、（中略）后がねにておはします」と嬉子が、さらに妍子所生の禎子内親王も「后に等しき身」と数えられる（巻十七・おむがく）。その禎子内親王の蒙着の腰結役を務めたのも彰子で、さらに嬉子の皇子出産の産養も担当する予定であったが、嬉子は出産後十九歳で急逝した。大宮彰子は新生の皇子親仁（後の後冷泉）を自ら養育することになる。

さて、歴史物語『栄花物語』であるが、後宮の記事を中心にした道長賛美の物語で、撰閲家の男性たちを中心に描いて道長を称賛しつつも批判的である『大鏡』と対置される。ただし時系列の混乱や情報の偏りなどから、虚構性を内包した「物語」として読み直す動きもある。天皇家との血脈、主催した行事の絢爛さなどを余すところなく描いた道長の栄華というが、自身は巻第三十で退場し、残る物語世界のほぼ終盤まで一家の要として存在感を保つのは彰子であった。それほどまでに彰子が重きを置かれたのは、単に長命であったからであろうか。以下、彰子の生涯を物語によって辿ってゆく。

彰子は、「めでたき女君生れたまひぬ」と紹介され（巻三・さまざまのよろこび）、物語に登場してくる。誕生の時父道長は左京大夫にすぎず、従姉妹である定子の父道隆は大納言で、し

万寿三年（一〇二六）、彰子は三十九歳で出家した。尼削ぎ姿となった彰子は史上二人目の「女院」に叙せられ、一家の中心となって皇嗣を繋ぐ婚姻を次々に実行してゆく。妍子が三十四歳で崩御したのに続いて道長も薨去、後一条が二十九歳で薨去、裳瘡のため威子も三十八歳で崩御すると、彰子は「わが命長きこそ恥づかしけれ」と嘆きながら（巻三十三・きるはわびしとなげく女房）、残された二人の皇女の世話をする。彰子は道長の意志を継ぐかのように一家と後宮の関係を強めてゆく。東宮敦成が即位すると妹妍子所生の禎子内親王が皇后となり、末妹嬉子の遺した親仁が東宮になると妹威子所生の一品宮章子内親王を入内させ、自身の子や孫と妹たちの産んだ皇女との結婚によって彰子の立場はさらにゆるぎないものになる。長暦三年（一一〇三九）、剃髪して俗世に距離を置こうとするが、一族の悲劇はそれを許さなかった。

寛徳二年（一一〇四五）正月、後朱雀は東宮に「上東門院によく仕うまつりたまへ」と遺言して、三十七歳で崩御する。彰子は皇子二人を先立たせ、「命長くてかかる御事を見ること」と悲嘆

かも「大姫君、小姫君、いみじくかきづきたてて、内、東宮にと申しこころざしたり」という志があり、実際、定子は一条の後宮に入内して立后し、続いて妹の原子も東宮（後の三条）に入内した。しかし、道隆は皇子誕生を見ないまま志半ばで薨去、定子の敦康親王出産も一家凋落の陰に沈んでしまふ。彰子も一条に入内して中宮となるが御子には恵まれず、皇后定子の崩御の後八年を経て、ようやく敦成（後の後一条）、敦良（後の後朱雀）二皇子の誕生を得た。彰子の物語は、ここから始まったといえる。

二皇子誕生間もなく一条が崩御した時、彰子はまだ二十四歳であった。三条の御代、彰子は皇太后となるが、物語は「大宮」という特別な称で呼び始める。三条退位の後、敦成が即位し、敦良が東宮となると、帝と東宮の母として重く扱われるようになる。や

にくれた（巻三十六・根あはせ）。彰子の養育した後冷泉と章子内親王は睦ましく、彰子が最勝八講に参内すると「左右に、帝、后を下に据ゑる素晴らしい構図ができあがる（巻三十七・けぶりの後）。しかし、後冷泉も先立ち、「大女院」と呼ばれた彰子だが、後には女院を辞して、「上東門院」、「東北院」などと呼ばれ（巻三十九・布引の滝）、承保元年（一一〇七四）八十七歳で薨去する。相談相手を喪い途方に暮れる弟教通の姿に、道長亡き後の一家を守った彰子の存在の大きさをみる。若くして逝った妹たち三人の葬送記事を丁寧な描いた物語であったが、上東門院彰子の葬送記事は簡素である。

彰子が二人の皇子を授かったことが道長家の栄華の出発であった。皇子二人、孫一人が即位し、母を同じくする妹たちは皆入内した。しかし、若くして次々と旅立った結果、彰子は一人で後宮を背負わなければならなくなった。道長亡きあとの撰閲家、一条亡き後の後宮、父と夫二人の遺志を守って双方の要となって最後まで一族をまとめたのが彰子の人生であり、それを「道長の栄華」と人々は記憶したのではなかつたか。

# 近代日本音楽史を 彩る女性たち

## 2 アメリカに渡った 最初的女子留学生

佐野 仁美

本学発達教育学部  
児童教育学科准教授

は、渡米経験を持つ北海道開拓使次官黒田清隆であった。黒田は、教養のあるアメリカ女性に感銘を受け、人材育成の上で子どもを教育する母親の役割が重要であると考え、女子教育に資するために幼年女子の留学を建議した。後に三井物産の初代社長となる兄益田孝（一八四八—一九三八）は、英語が堪能で、アメリカ公使館の通訳を務めたこともあった。幕府の役人の父とともに一八六四（元治元）年の遣欧使節に随行した経験を持つ孝は、養女に出されていた繁子に留学を勧めたのである。

繁子は、ニューヨーク州のアボット家が経営する学校でピアノや声楽の授業を受けた。信仰深いピューリタンの同家に寄宿した繁子は、留学生の瓜生外吉（一八五七—一九三七）と出会う。教会で歌われる賛美歌も音楽への志向を高めただろう。

一八七八年に、繁子はニューヨーク州のヴァッサー大学音楽科のピアノ・クラスに入学する。女子教育が進んでいた当時のアメリカでも、女子の高等教育への反対意見は根強く、ハーバード大学やコロンビア大学などは女性に門戸を閉ざしていた。ヴァッサー大学は、実業家マシュー・ヴァッサーによ

り設立された名門女子大で、同時に松が入学した本科は四年間の年限であるが、三年間の音楽科では学位を取得できなかった。

繁子は、週二回のレッスンの他、音楽理論や和声学の授業を受け、演奏会にも通い、学内演奏会や卒業演奏会では、シューベルト《即興曲》作品90-4やメンデルスゾーン《プレスト・アジタート》、ショパン《華麗なるワルツ》作品34-1を演奏した。これらはサロンのな、耳に馴染みの良い曲である。ヨーロッパと同じく、当時のアメリカの中流家庭ではピアノが置かれ、娘に弾かせることが一種のステータスになっていた。そこで演奏される分りやすく、心地よい曲がレパートリーとして求められていたのだろう。

大学を卒業した繁子は、一八八一（明治一四年）に帰国した。アメリカでの経験を女子教育に生かしたいと考えていた留学生たちだが、翌年に帰国した捨松と梅子には望むような職がなく、捨松は陸軍卿大山巖と結婚し、苦勞して教職についた梅子は、一九〇〇年に自ら女子英学塾（後の津田塾大学）を設立する。他方、音楽を専攻した繁子は、一八八二年三月に音楽取調掛に職を得、私生活でも瓜生外吉（後の海軍大



図1 楊洲周延「欧洲管弦楽合奏之図」1889（明治22）年（GAS MUSEUM がす資料館蔵）  
ピアノを弾いている女性が繁子と言われている。

将）と同年一二月に結婚した。

繁子の活動をまずは教育面より見てみよう。日本では、一八八〇（明治一三）年に来日した米国人音楽教育家メーソン（一八一八—一九六〇）と伊澤修二（一八五二—一九一七）を中心に音楽取調掛で音楽の伝習が始まったばかりで、教師が不足していた。タイミングよく帰国した繁子はピアノ教師になるが、一八八二年七月に一時帰国を願ったメーソンはそのまま解雇されてしまう。伊澤は、一八八四年の『音楽取調掛成績申報書』で「従来本邦人中能く此教授二任スベキモノナク當初ハメーソン氏之ヲ傳習シタリシガ幸ニ瓜生繁女

ノ米國ニ於テ該科ヲ卒業シ帰國シタルニヨリ方今ニ在リテハ専ラ同人之ヲ教授シ其進歩モ大ニ見ルベキモノアルヲ致セリ」と書いている。伊澤の言葉にもあるように、繁子は大学で教えを受けたウイリーが英訳したウルバッハの教則本を用い、幸田延らその後の東京音楽学校で教鞭をとる優秀な人材を育て

た。さらに、一八八六年より東京高等女学校で教え、英語も担当する。

演奏面でも、読売新聞社の一八九二（明治二五）年の婦人和洋音楽家人気投票で洋楽部門第二位となった繁子は、盛んに活動を行っていたと想像され、華やかな宴が繰り広げられていた鹿鳴館で演奏したこともあった（図1）。一八八九年に華族会館で行われた東京音楽学校の「音楽同好会」ではウェーバー《舞踏への勧誘》を弾き、同年の東京音楽学校卒業式でもこの曲を演奏したとの記録がある。

一八九三（明治二六）年に、六人目の子どもを妊娠していた繁子は東京音楽学校を退職する。一〇年間の留学に対する恩返しという使命感を持っていても、家庭との両立は困難であったのだろう。しかし、女子高等師範学校（後のお茶の水女子大学）には一九〇二年まで勤めたことを考えると、個人的な理由だけではないように思われる。実は、上述の人気投票の第一位は、ウィーン留学中の幸田延であった。すでに一八八五年の音楽取調掛卒業演奏会で《舞踏への勧誘》を弾いた幸田は、少なくとも技術的には繁子が学んだサロン音楽的なレパートリーを弾けるレヴェルに達していた。家庭の事情もあろうが、日本の音

楽界をリードする存在であった音楽学校を辞したのは、後進に道を譲るだけでなく、自らの役割の限界を感じたからではないだろうか。

音楽取調掛は一八八七（明治二〇）年に東京音楽学校となって芸術家育成へと舵を切り、以後の外国人教師も本場のヨーロッパから雇われるようになっていく。振り返ってみれば、アメリカで繁子が受けた教育は、あくまで「良妻賢母」を育てるという価値観にもとづく家庭内で楽しむ音楽であった。加えて海軍士官の妻には、多くの役割も期待されただろう。音楽家として自立した日本人女性の出現までは、しばらく待たねばならない。

主要参考文献：

- 生田澄江「瓜生繁子—もう一人の女子留学生—」（文藝春秋社、二〇〇九年）
- 亀田帛子「瓜生繁子断章—東京音楽学校時代を中心に—」（『津田塾大学紀要』第24号、一九九二年、1—16頁）
- 長井美編「自叙 益田孝翁伝」（中公文庫、一九八九年）
- 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』（第1巻、音楽之友社、一九八七年）
- 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇』（第1巻、音楽之友社、一九九〇年）
- 「婦人音楽家の人気投票」（『音楽雑誌』第19号、一八九二年、18頁）

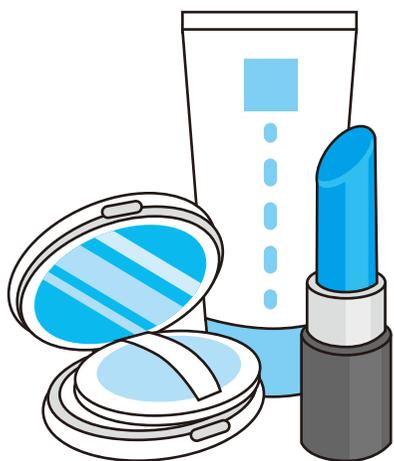


# 化粧研究雑感 — 女性のライフサイクルと装い —

日比野 英子 本学健康科学部心理学科教授

筆者の研究は、心と外見（装い）の関係に着目したもので、具体的には女性にとって化粧という行為・習慣がどのような心理的機能を持っているのか探ることになった。一九八九年の研究開始当初は、大学病院の精神科に入院中の女性を対象としていたが、その後21世紀を目前に「高齢化社会」と声高に叫ばれる時代が到来し、筆者の研究も老人福祉施設利用の高齢女性を対象とするようになった。

それまでも高齢女性対象の化粧施術の試みは、実践的研究のみならずボランティア活動としても行われていて、特に認知症対策として「化粧療法」という俗称がマスメディアに取り上げられるようになっており、なんとも居心地の悪い思いをした記憶がある。当然、化粧で認知症の中核症状が治癒するわけではなく、間接的に周辺症状の改善が見られたのである。その改善点をまとめると(1)自己への関心の増大(自己の鏡像へ関心の増大、整容行動の増加など)、(2)社会的積極性の増大(他者への働きかけの増加)、(3)問題行動・症状の軽減(多動・多弁、易怒的気分、抑うつ気分などの低下)といった三点が考えられる(伊波・浜、一九九三など)。具体例をあげると、医師の診察の間もじっと着席できなかった人が、化粧をしてからは一定



時間座って診察を受けることができたり、リハビリテーションの場から抜け出さずに最後まで参加できたというようなことから、抑うつ状態で動けなかった人がかつての習慣であった散歩を再開したというようなものまである。このような報告から、高齢女性にとって化粧は社会的適応力を高める効果を持っていると考えられた。いわば自我機能の回復ともいえる現象がみられたのである。何故このような効果がみられるのかを考察した時に、当時の80歳〜100歳の対象者にとって、化粧は大人になるときに身に着けた習慣であり、「女のたしなみ」という意識があったために、大人の女性として相應しい行動を惹起したものと考えた。

このような話題が出た時に、研究者仲間から「今の中学生が高齢者になった時に、同じ効果があるとは思えませんね。」という声が上がった。というのは、「しみ」と「儀礼・マナー」の二つがあると述べている。中学生時代に化粧を始めたころは、「遊び」「楽しみ」であった化粧も、長じて母親となり、育児・家事・職業と多重役割を担うようになった女性にとっては、「儀礼・マナー」という側面の比重が大きくなってきたのではないだろうか。化粧が具有している二つの心理的機能は、一方は個人の内からの要請(楽しみ)であり、もう一方は社会からの要請(儀礼・マナー)であるが、女性がどのような人生のステージにいるのかによって、その比重が変化するのではないだろうか。

ここで今一度、筆者の高齢女性を対象とした化粧研究(二〇〇二)に戻ってみると、そのインタビュー記録からは化粧を「女のたしなみ」であるという意味もくみ取れる一方で、化粧にまつわる生き生きとした情感あふれるエピソードが語られ、最後は「なかなかいい人生でしたよ。」と振り返られることもしばしばあった。かなり大きな言い方で恐縮ではあるが、人生の統合という課題に向き合っておられる瞬間に少しお付き合い合いた気持ちになった。

〈文献〉

伊波和恵・浜治世「老年期痴呆症者における情動活性化の試み」『健康心理学研究』日本健康心理学会機関誌編集委員会(一九九三年)

菅原健介「化粧による自己実現」動機、効用、アイデンティティ」『化粧行動の社会心理学 化粧する人間のこころと行動』北大路書房、二〇〇二年

日比野英子「痴呆性高齢者への化粧によるケアの検討」『月間福祉』三月号 全国社会福祉協議会、二〇〇一年

福井智琴「乳幼児期の子をもつ母親の母親像と養育態度」(京都橋科大学大学院健康科学研究科二〇一八年度修士論文)

のころ化粧開始時期の低年齢化がみられ、街に化粧を施した中学生が現れ、子ども用のおもちゃにまで化粧品や化粧道具が登場したからである。このころの思春期の年代の化粧の心理的意味として、「遊びの化粧」創造の楽しみ」といったことが挙げられた。残念ながら、筆者自身が彼女たちが高齢者になった時に、かの研究者仲間の予言を確認することはできないが、果たして中学生で化粧を始めた世代は、化粧や被服行動を「楽しみ」として持ち続けているのだろうか。

おりしも今年度、本学大学院健康科学研究科の院生福井智琴氏が乳幼児の母親の養育態度と生活スタイルをめぐる探索的研究を実施したが、その対象の大半が30歳から40歳の保育所に子どもを預けている母親たちであり、ちょうど二〇〇〇年前後に十代であった女性たちである。質問紙調査にある「服装や髪型をきれいにする」という装いに関する項目が、彼女たちにとってどのような意味を持つのか、興味深いものがあった。その回答について因子分析が行われた結果、装いの項目は「子どもに善悪の区別をしつける」という養育行動項目と同じ次元に配置され、その次元は「几帳面さ」にかかわる因子と解釈された。職業を持ちながら乳幼児を養育している若いお母さんたちにとって、装うことは「遊び」や「楽しみ」というより、むしろ努力目標に近い意味を持っているということが窺える。ちなみに50歳から70歳代の母親にも同じ質問をしたところ、装いについての質問項目は「ゆとり」を表す因子に含まれ、この年代の母親にとって、装いは忙しい中でもゆとりを持つことに関わる意味を持っていた。

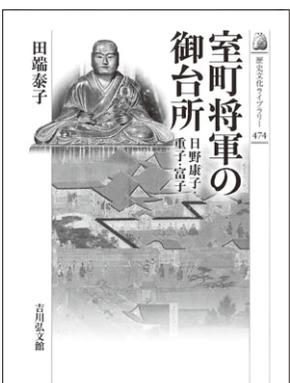
菅原(二〇〇二)は化粧の持つ心理的機能として、「楽



## 『室町将軍の御台所 日野康子・重子・富子』

田端泰子 著 吉川弘文館 二〇一八年

増淵 徹 本学文学部歴史学科教授



日本の歴史における「悪女」の代表的な女性、日野富子。かつては、夫義政を差し置いて幕府政治の実権を握り、我が子義尚を将軍にせんとして応仁の乱のきっかけの一つをつくり、挙句の果ては参戦中の大名に金を貸すなど、その強引かつ貪欲な人物像が語られることが多かった。その人物像にはどれだけの根拠があり、翻って彼女の实像はいかなるものであったのか。本書は、この問題への関心を基本線に叙述されたものである。

日野富子に対して、著者は以前から強い関心を抱いていた。その関心の重点は富子が「家」の中で果たした役割

を位置付けることで、早くは「日野富子と将軍『家』」（『日本中世女性史論』（塙書房 一九九四年）に収載）に示され、近年でも「将軍家と日野家・山科家―日野康子と日野栄子の役割を中心に―」（『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』二四 二〇一六年）などで、幕政・家政や所領経営との関係から解き明かそうとする試みが続けてきた。その結果として著者は、富子を義政期には義政と並ぶ幕政の主体としてとらえ、義政死後も幕政への発言権を有したとするなど、彼女の政治面における存在意義を強調する。

また、研究成果を踏まえての著者の

の足利将軍家正室が将軍家内だけでなく朝廷・幕府の中でどのような役割を果たしたか、その全体史を提示しようとする意欲のもとに叙述されたものである。

プロローグとエピローグを除き、全体は大きく四章から構成される（章立てはしていない）。その主要な部分をかいつまんで紹介しておこう。

一章「将軍の正室、天皇の准母」では、足利義満時代と日野康子を論じる。康子は後小松天皇の准母の地位を得て、義満・後小松天皇期の武家・公家の融合を推進するとともに、当該期の朝幕関係の安定を支える存在となったとし、その背景を義満の朝廷への対応姿勢や日野家出身の公家・女官たちの動きを交えて論じている。

二章「恐怖政治から得た教戒」では、重子が正室に入ったにもかかわらず、夫義教の恐怖政治によって日野家が大きな打撃を受けたこと、嘉吉の変後の短期間の義勝期を経て将軍についた義政時代の初期には、重子が幕政に対し適切な介入を行ったことが述べられる。

三章「大乱の時代」、四章「武家の執政、公家の外護者」では、応仁の乱の時期からそれ以後の日野富子を論じる。寛正年間の初めころから富子が義政と並ぶ存在となり、文明年間の一期には義政に代わり執政の座にあったこと、義政の復帰後も彼女の政治上の役割は低下しなかったことが述べられる。

二〇一一年の前著から続く注目すべき著者の論点として、文明九年に富子が畠山氏らに貸した金銭を、参戦大名に対する撤収・慰労費用として理解し、富子が応仁の乱の終結に向けての私財を投じて積極的な活動を行ったと評価する点がある（三章）。こうした私財の背景には、足利将軍家の正室に与えられていた御料所からの収入を軸に、京中の酒屋公事銭の月宛支給や大名・公家からの進物などを加えて構成される経済力を背景に、正室（御台所）が独自の「家」を形成していることがあったからであるが、この点も著者ならではの視点といえよう。

本書が含まれるシリーズは、堅い研究書というよりも、もっと深く知れた

近年のテーマの一つとなってきたものに、富子という人物像の具体化への試みがあり、それは『足利義政と日野富子―夫婦で担った室町将軍家』（山川出版社 日本史リブレット 二〇一一年）に代表される、一般向けのわかりやすい著述として展開されてきた。

本書も、この近年の著者の姿勢の延長上にあり、著述の半分以上の割合を富子の時代が占めるが（これは基本的に史料の残存状況という条件に由来する）、しかし富子を対象とする個人研究にとどまてはいない。書名にも示されているように、前史としての康子・重子の時代を含めて、日野家出身

い読者を念頭に、研究を踏まえてわかりやすく叙述するスタイルをとる。それもあってか、「感じる」「思う」という表現を伴って、著者が幾分おおらかに論を進めている気配もある。長年の研究を踏まえて到達した、著者の「日野富子論」を中心に、それを跡付ける「康子論」「重子論」という位置づけになっていると理解することも可能だろうか。著者独自の評価が述べられているだけに、応仁の乱期を扱った別の執筆者の著書と読み比べをし、著者による評価の違いを見るのも、歴史好きにとっては興味深いだろう。

最後にひとつ。本書は、三人の正室女性を論じながらも、各所で公家山科家や、その所領と関わる山科郷の住民など、在地の動向を織り交ぜながら叙述を進めていく。武家・公家という社会の支配階層だけでなく、とくに応仁の乱と在地の住民の動向の関りを具体的に論じたいという著者の意図に沿ったものではあるが、反面、乱の推移とどう連動するかが直ちにはわかりにくく、困惑する読者もあろう。詳細な年表がほしいところである。

# 近代ヨーロッパにおける女性の社会進出

## —イギリスとフランスの事例から—

近代化の先頭を走っていたイギリス・フランスでは、19世紀後半、義務教育が導入されるなど学制が整備され、学歴資格と職業資格との結びつきが強まるようになりました。本シンポジウムでは、こうした状況下の両国において、女性が職業その他の公共圏に、いかにして進出していったのか、その歴史的な経緯を解明していきます。あわせて、わが国での同様の問題を比較考察する材料を提供することをめざし、講演後のパネルディスカッションでは、両講師の論点をさらに深めます。

日時

2019年7月6日(土) 13:00~16:30

会場

キャンパスプラザ京都

JR・地下鉄・近鉄「京都駅」下車、JR「京都駅」中央口より徒歩約5分(ビックカメラJR京都駅前)

講師

松田 祐子 女性史研究家

松浦 京子 本学文学部歴史学科教授

司会・コーディネーター

渡邊 和行 本学文学部歴史学科教授

&lt;受講料&gt; 無料 &lt;定員&gt; 250名 \*5月8日(水)より先着順にて受付

&lt;申込方法&gt; 本学HPの申込フォーム(右記QRコードからアクセス)・E-mail・電話・FAXにて受付。

①講座名 ②氏名(漢字・フリガナ) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号を添えてお申し込みください。複数名でお申込みの場合は、全員分のお名前をお知らせください。

&lt;申込・問合せ先&gt; 京都橘大学エクステンションセンター(学術振興課)

TEL. 075-574-4186(直通) \*受付時間 9:00~17:00(土日祝を除く)

FAX. 075-574-4149 E-mail aca-ext@tachibana-u.ac.jp



### LIME 通信

平成最後の発行となるクロノス41号をお届けします。

日本では平成という30年の間に女性の社会進出は着実に進み、より多くの女性が活躍するにはどうするべきか、さまざまな議論が交わされています。しかし世界に目を向けると、自由や尊厳すらも保証されない女性たちが大勢いる現実が見えてきます。

2018年のノーベル平和賞は、コンゴの医師であるデニ・ムクウェゲ氏とイラクの人権活動家のナディア・ムラド氏が受賞しました。2人は紛争地域で性暴力被害者たちの支援を行い、その実状を世界に発信し救済を求める

活動を続けてきました。

ムラド氏は受賞のスピーチで、国や国際社会は、紛争下で行われる迫害や性暴力に無関心であるとし、加害者は罰せられるべきであること、教育の重要性、そして抑圧と戦うために団結し、声をあげましょうと訴えました。

性差別や迫害といった大きな問題を解決することは、簡単ではありません。ですが、私たち一人一人が何かに違和感を覚えたとき、どうしたらいいのだろうと問題意識をもつことが、何かを変えるきっかけになるのではないのでしょうか。

CHRONOS(クロノス) vol.41

発行日: 2019年3月

発行: 京都橘大学 女性歴史文化研究所  
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34  
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149  
E-mail: iwhc@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学  
女性歴史文化研究所